



関市イメージキャラクター
「関まほさん」

Seki

せき

2016
6
No.1664

特集
戦国武将

大嶋雲八の面影を訪ねて

…P2～5

大嶋雲八

TOPICS

- ・せきのまちづくり通信簿結果発表 P6～8
- ・お知らせ…P20～28
- ・文化会館／図書館…P29
- ・しあわせヘルスだより…P30,31



再発見!

初代関藩主にして弓の名手
戦国武将 大嶋雲八の
 面影を訪ねて

戦国の世を軽快に駆け抜けた、
 雲八の生涯

○信長の侵攻から関を守った雲八

大嶋雲八（光義）は、1508年に関村で生まれ、幼少で孤獨の身になった。成長するにつれ射芸を身に付け、樹蔭に隠れた敵をそのまま射抜くほどの腕前となり、関村領主 長井隼人に属して、しばしば武功を立てた。

領主の長井隼人は「天下布武」を志す信長の中濃侵攻に備えるため、堂洞の岸勘解由、加治田の佐藤紀伊守と同盟を結んだが、信長の巧みな計略により加治田の佐藤は裏切り、堂洞も落城した。その際、長井隼人が戦わずして撤退したことで関は無事に済んだのだが、これは、雲八が関村を守るために逃がしたおかげだといわれている。

○信長・秀吉・家康 三英傑に仕え大名へ

長井隼人撤退後、雲八は信長に仕え弓足軽頭に任じられ、はじめ知行地を手にした。信長没後には豊臣秀吉に弓足軽大将として召し抱えられ、秀吉が亡くなると徳川家康に従い、東軍についた関ヶ原の戦いの武功により1万8千石と増領され大名となった。初代関藩藩主の誕生である。

その後、1604年に97歳でこの世を去り、妙興山大雲寺（伊勢町45）に葬られた。今も、この大雲寺を雲八の菩提寺とし、境内墓地中央には、「大雲院殿道林日祝神儀 慶長九甲辰年 八月廿三日」と刻まれた墓碑がある。



大嶋雲八の墓（妙興山大雲寺）



妙興山寺
大雲寺
(伊勢町)



妙興山大雲寺に伝わる雲八着用の甲冑一式(右)



大嶋家の家紋として代々伝わる『揚羽蝶』

大嶋雲八伝

1508年	関村梅竜寺に誕生
1528年	長井藤左衛門が安桜山に関城を築く 雲八20歳の下級武将
1564年	その後、道三の義弟でもある嫡子長井隼人が、関周辺を勢力下に置く
1565年	信長の戦力に対抗するべく、堂洞、加治田、関が固い三国同盟を結ぶ 雲八56歳
1567年	信長、中濃に侵攻 信長の巧みな計略にかかり
1582年	加治田佐藤紀伊守が同盟を破棄する 堂洞城、岸勘解由は敗戦 関領主長井隼人、逃亡する
1591年	稲葉山城陥落 このとき雲八59歳 本能寺の変
1600年	秀吉が伏見城を築城 大嶋一族は伏見深草に本拠地を移す(現京都教育大学付属高校付近)
1604年	摂津、武庫など合わせて1万1200石を秀吉から拝領
	関ヶ原の戦いの功績で家康より加増され、関藩1万8千石成立、大名となる 関市域分は関村、池尻村、山田村、鋳物師屋村、大迫間村 雲八97歳で没する

※関藩は関ヶ原の戦い直後に立藩したが、慶長9年(1604)雲八の死後、遺領を分与したため廃藩となる。長男光成が継承した大嶋家は、4代目が14歳で早世したことからお家断絶となったことから、関村周辺は二男光政の川辺大嶋家の知行地となった。また三男光俊の迫間大嶋家は明治時代まで続いた。

今もなお残る大嶋家の威光

○安桜小学校のルーツ 大嶋屋敷

明治5年（1872）、太政官布告の学制発布によって、各村々で小学校が発足することとなった。関村では、この関御役所を仮校舎として授業を開始した。以降、明治22年（1889）関村の町制施行による年々の人口増加、明治23年（1890）二階建校舎に改築、明治29年（1896）平屋建一棟を増築。しかし、就学児童の増加は止まず、春日東（現・安桜小学校々地）に新地を求め、明治38年（1905）高等科が移転、明治44年（1911）尋常科が移転。これが安桜小学校のはじめである。

江戸時代の大嶋家の関御役所門が、明治時代には、関尋常高等小学校の門として活用され、現在では、肥田瀬に移転され大切に保存されている。また、御屋敷跡地には警察署が設置された。

堂々たる構えの関御役所門（肥田瀬地内へ移設）



江戸時代に描かれた「関村絵図」

ほぼ中央に「御屋敷前町」とあり、その右手（東側）に「御蔵屋敷」と記してある。ここが江戸時代の関村領主であった、旗本大嶋家の御屋敷前町を略して、前町となったことがわかる。

○京都・大阪にも残る大嶋の名

雲八の武功の数々により手にした土地は、関村周辺のみにとどまらず、京都や大阪にまで及ぶこととなった。

京都市伏見区には、【深草大島屋敷町】（現在の京都教育大学付属高校付近）という地名があるが、これは雲八の屋敷が京都にあったことに由来し、大阪府豊中市にある【大島町】も雲八の領地であったことに由来する。関藩主【大嶋】の名が、今なお残ることからも、当時の力の大きさがうかがい知れる。

また、大嶋家の代々の領主は江戸に在住し、各支配地には家臣が駐在して治世を行っていたため、江戸の古地図には「大島」の名を見ることができ、現在の霞ヶ関周辺に1700坪もの広大な土地を有していたことがわかる。



今回の「雲八特集」にあたって協力いただいた、大嶋一族研究の第1人者 後藤正敏さん。



山華寺 白雲大 (迫間)



今も残る迫間大嶋家の甲冑



迫間に残る もう一つの 大嶋

雲八は、天正14年(1586)に白華山びやっかさん大雲寺(迫間1184)を創建した。

大名雲八の死後、遺領は四人の子どもに分与され、三男の旗本大嶋雲四郎(光俊)が、初代迫間領主となった。

雲四郎は関ヶ原の合戦に参戦し武功を立てたほか、二条城の普請に尽力するなど家康に重用され、以降、旗本大嶋家は幕末までこの地の領主として家督を継ぐこととなる。

現在でも、雲四郎の菩提寺となる白華山大雲寺では、命日となる7月18日に法要と奇祭「十六善神祭」が行われ「落雷除け」の守り札が配られている。



初代雲四郎をはじめ一族代々の墓



迫間大雲寺観音堂(絵画)



迫間大雲寺では住職をはじめ、総代の皆さんから迫間大嶋家に関する貴重な資料を基に、話を聞かせていただきました。

関市の謎解き観光アプリ 雲揚羽 (KUMOAGEHA)



あなたも時空の旅人となって幻の名刀『雲揚羽』を探し求めてみませんか・・・好評配信中!! (ダウンロード無料)

